

成長を続けるクラウドサービスの 新たな基盤として Dell EMC VxRail を導入

ITソリューションプロバイダーのオロでは、成長を続けるクラウドサービスの新しい基盤としてデル・テクノロジーズの「Dell EMC VxRail」を導入、基盤の運用管理性と拡張性を大幅に高めている。



- ・お客さま名/株式会社オロ
- ・業 種/情報通信サービス
- ・導 入 製 品/ Dell EMC VxRail

■主な課題

・クラウドソリューション事業の成長に伴いクラウドサービスを支えるハードウェアの台数が増え、運用管理負荷が高まり続けていた。

■成果

Dell EMC VxRailの導入により、クラウドサービス基盤の運用管理負荷の大幅な低減とリソースの柔軟な拡張を可能にする環境が整えられた。

「Dell EMC VxRailの導入でクラウドサービス基盤の運用管理性・拡張性が大幅に向上し、お客さまへのサービス提案の幅も広がると考えています」

株式会社オロ
クラウドソリューション事業部
製品開発グループ インフラチーム
チーム長
小林 樹津生 氏

■課題

成長を続けるクラウドソリューション 膨らむサービス基盤の運用管理負荷

オロは1999年1月創業のITソリューションプロバイダーだ。クラウドソリューション事業とデジタルトランスフォーメーション事業の2つを柱にビジネスを展開し、「世界に誇れる企業をつくる」という大目標の下、堅調に業績を推移させ、コロナ禍が発生・深刻化した2020年も連結で前年比4.3%増の52億4,000万円を売り上げている。クラウドソリューション事業の中核サービスであるクラウドERP「ZAC」も年々ユーザーのすそ野を広げ、2020年時点で750社・20万ライセンスを超える導入実績を積み上げている。

そうしたクラウドソリューション事業の成長に伴い、膨らみ始めたのがサービス基盤の運用管理負荷だった。

「当社のクラウドサービスを支える基盤はサーバとスイッチ、ストレージから成る3ティアの構造を成し、サービスが成長するにつれて異なるハードウェアが数多く導入され、運用管理に相応の手間がかかるようになっていました。ゆえに、クラウドソリューション事業の成長に資する、運用管理性と拡張性に優れた新しい基盤への移行が求められていました」と、クラウドソリューション事業部 製品開発グループ インフラチームのチーム長、小林樹津生氏は振り返る。

この課題を解決するすべとして同社が採用したのが、デル・テクノロジーズのハイパーコンバージドインフラストラクチャ (HCI) 「Dell EMC VxRail」だった。

■課題解決のアプローチ

比類なき運用管理性と拡張性で VxRail を選択

VxRailを導入する以前において、オロのクラ

ウドサービス基盤はおよそ80ノードの物理サーバと20台強のスイッチ、20台強のストレージによって構成されていた。

「それらの日々の運用管理を少人数のチームで行っていたので、各人の負担は決して小さくありませんでした。その中で成長を続けるクラウドソリューション事業を支えていくには、いずれかのタイミングで基盤の構造をVxRailのようなHCIへと移行させる必要があると考えていました。そこで基盤拡張のタイミングに合わせてVxRailの導入を決めたわけです」(小林氏)。

もっとも、HCIの選択肢は一つではない。その中で同社がVxRailを選んだ最大の理由は、VMwareとの統合製品ならではの機能「ワンクリックアップデート」にあったという。この機能はVMware vSphere®を含めたVxRail環境の更新をワンクリックで完了させる自動化の仕組みだ。

「3ティア構成の基盤の運用管理で最も手間がかかるのがハイパーバイザーやOSの更新と更新後の検証作業です。それがVxRailの場合、VMware vSphere®を含めた検証済みの最新環境へとワンクリックで更新できます。このような更新作業の自動化を実現している製品はHCI製品の中にもなく、非常に魅力的でした」(小林氏)。

また、ノードの追加が簡単に行える拡張性やVMware vSphere®との親和性が高いSDS (Software-Defined Storage) 「VMware vSAN (TM)」をサポートしていることも、VxRailを高く評価したポイントだったと小林氏は付け加える。

もう一つ、VxRailの導入を提案した兼松エレクトロニクス (以下 KEL) への信頼もVxRailの選定に作用した。

「当社とKELとの付き合いは長く、KELには全幅の信頼を置いてきました。そのKELがHCIに対する当社のニーズを知り、早くから導入を提案してきたのがVxRailです。VMwareのエキスパートでもあるKELが推奨し、かつ導入を

支援してくれるのであれば VxRail の導入に間違いはないと安心できました」(小林氏)。

こうして同社は VxRail の導入を決め、KEL によるインフラ設計・構築、オンサイトでの稼働テストを経て 2020 年 10 月から運用を始動させた。導入した VxRail のノード数は 12 ノードで vSAN 環境では許容ホスト障害数 (FFT) が 2 台の RAID6 構成をとっている。

「クラウドサービス基盤はお客さまが使う基盤ですのでストレージの冗長度はかなり高目の設定にしました」(小林氏)。

こうした構成の下、新規顧客向けに VxRail のリソースの提供を開始しているほか、既存顧客向けのリソースも一部 VxRail へ移行させている。

「VxRail の導入は滞りなく進みましたが、それは、当社の細かな要望やテクニカルな質問に的確に対応してくれた KEL のおかげだと感謝しています」とインフラチームのシニアインフラエンジニア、西端敏裕氏は明かします。

■導入効果と展望

運用管理工数の大幅削減に 確かな手ごたえ サービス基盤のすべてを HCI ベースへ

小林・西端の両氏によれば、VxRail は運用開始から安定稼働を続けており、今後の効果に大きな期待が持てるという。

「例えば、従来の環境は仮想環境の更新作業に毎月 16 時間程度の時間を費やしていましたが、



株式会社オロ
クラウドソリューション事業部
製品開発グループ インフラチーム
チーム長
小林 樹津生 氏



株式会社オロ
クラウドソリューション事業部
製品開発グループ インフラチーム
シニアインフラエンジニア
西端 敏裕 氏

VxRail ではその時間が大幅に短縮できる見込みです。その一点だけでも相当の効果が期待できます」(小林氏)。

また、VxRail は VM のライブマイグレーションが安定しており、それも運用管理担当者の大きな負担軽減につながると西端氏は指摘する。

「ライブマイグレーションは、ホストサーバのメンテナンス時に VM をホストサーバ間で移す手段として必ず使われるものです。従来の環境はその処理に失敗することが間々あり、ゆえに担当者は処理が正しく行われるかどうかを張りつきで見なければなりません。それを不要にできる可能性が、ライブマイグレーションが安定している VxRail にはあるということです」ノード追加のしやすさも 3ティアの環境に比

べて格段に上であるという。

「例えば、3ティア構造の基盤ではノードを 1 台追加するたびにストレージ側の設定を変更するなどの作業が発生していました。それが VxRail の場合、ノードの追加をシステムに知らせるだけですべてが完了します。これまではノードを新たに調達してシステムへ追加するまでに 3 か月は必要でしたが、VxRail なら 1 週間から 1 か月程度で済むはず。クラウドサービスではリソースの拡張が急に必要になる場合も多いので、この差は決して小さくありません」(西端氏)。

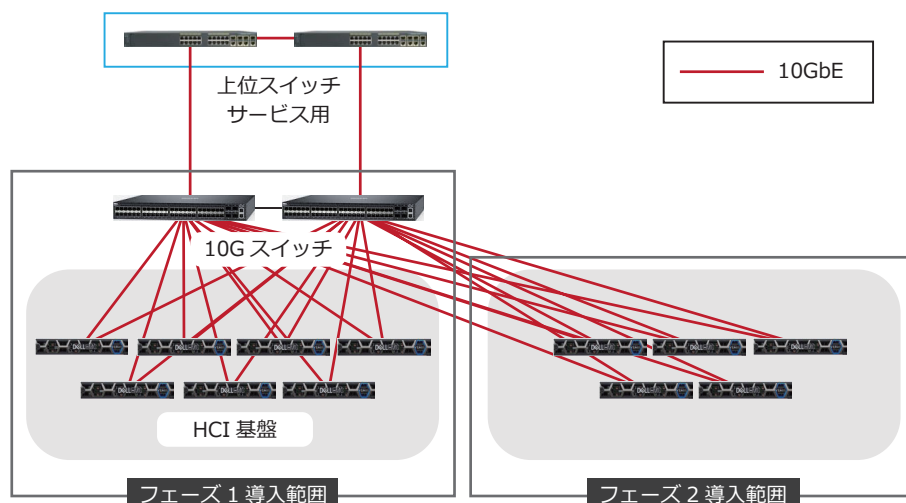
さらに、VxRail の導入は顧客に対するクラウドサービスの提案の幅を広げるうえでも有効であると、小林氏は話す。

「VxRail のストレージ環境として vSAN を採用したことでストレージノードを複数の拠点に分散させ、DR/BCP の構成をとるのも容易になりました。今後は、こうした利点を活かして、お客さまに対するクラウドサービスの提案の幅を広げていくつもりです」

オロではクラウドサービス基盤のすべてを HCI に切り替える計画であり、その HCI として VxRail が選ばれる可能性も大きいという。その点も踏まえながら、小林氏は VxRail の利点を次のようにまとめ、話を締めくくる。

「3ティア構造の基盤は、トラブル発生時の問題の切り分けが困難なうえに、問い合わせ先もバラバラで運用管理の担当者にとっては非常に手間のかかる仕組みといえます。それに対して VxRail はトラブル発生時の問い合わせ先がデル・テクノロジーズに一本化されており、その点でもシステムの可用性を可能な限り高いレベルで確保したい私たちにとって使い勝手の良い HCI です。今後も KEL からの情報と技術支援をいただきながら、VxRail の利点を最大限に活かしていきたいと考えています」

システム構成イメージ



KEL

<お問合せ先>
兼松エレクトロニクス株式会社
e-mail: dellemc@ml.kel.co.jp
〒104-8338 東京都中央区京橋2-13-10
https://www.kel-dellemc.com/